

〔作家の方法〕

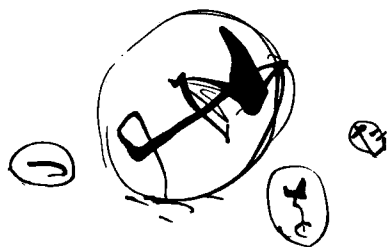
富岡多恵子

西鶴のかたり

岩波書店

作家の方法

富岡多恵子



西鶴のかたり

岩波書店

西鶴のかたり

作家の方法

1987年7月30日 第1刷発行 ©

定価 1100 円

著 者 とみ おか た え こ 富 岡 多 恵 子

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・法令印刷 製本・三水舎

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-003503-7

〈作家の方法〉

西鶴のかたり

目次

プロローグ 1

1 かたり 3

声と活字 4

聴くことば 読むことば 13

「うたう」から「かたる」へ 15

ナンバ 19

ことばのナンバと反ナンバ 30

2 浮世草子作者 37

俳諧師の転身 38

西鶴の「好色」 43

浄瑠璃と西鶴 48

3 ことばとの戯れ 51

ことばのパフォーマンス 52

歌のわかれ 60

散文のリズム 69

4 西鶴の風景 81

芭蕉と西鶴の松島 82

生活の匂い 86

海から見た大阪 94

ディテールの力 100

5 十三郎と迢空 103

大阪の発見 104

近代へ突走る 115

「うた」の力 118

6 土 地 125

家族の闇 126

小説へ 130

7 生きるリズム 137

間の山節 138

坂の上の闇 145

三枚起請 150

生きるリズム 154

エピソード——話したことを書いたこと

プロローグ

まず一回目、「かたり」というのはなんだろうか、いったい人間が「かたる」とはどういうことを、実作者として考えてきたことを体験を混じえてお話したいと思います。

二回目は、大阪生まれの西鶴という俳諧師が、四十歳ぐらいから突然俳諧をやめて浮世草子（散文）を書き出した、その書いた散文のなかに、彼は意識しなかったかもしれないですが、どういうふうに「かたり」があるかというのを、作品を大阪語のアクセント、イントネーションで読み、同じものを共通語で読んだりして考えたいと思います。それから同時代の近松の浄瑠璃にどういう「かたり」があるかも、聴いてみたいと思います。

三回目は、わたし自身が詩から小説へ移っていったことは、西鶴の前にひきあいに出すのは

おこがましくて申し訳けません、やはり韻文から散文へという道筋ですから、型からの脱出を、西鶴の作品にそいながらわたしの体験をお話したいと思っています。ですから最初は、西鶴がぜんぜん出てこないからといって文句いわないでくださいね。

1

か

た

り

声と活字

まず、お渡ししたプリントに、わたしの詩が載っていますね、いまから二十年ぐらい前に書いた詩です。

なぜここに出したかといいますと、詩というのはなぜ行をこんなに短く変えるのか、なかなかうまく答えられないからなんです。散文は原稿用紙の上から下までびっしりつながっているのに、詩はなぜ下をいっぱいあけているのか。たとえば、二字書いても一行だし、二十字書いても一行です。そういうふうになぜ行を変えるか、詩人自身もたいていなかなかうまく答えられないんです。それはなぜかということを考えていただくために、のちほど自分で朗読します。この詩をたとえば新劇の女優さんにでも読んでもらいますと、どういうふうになるか、想像

してみてください。たとえば岸田今日子さんが読む、おそろくたいへん上手ですよ。訓練された声ですからことばが聞きやすいと思うんです。けれども、本人が読むほうがもったいい、と思つて詩人は自分で読むんですね。

もともと詩というのは声に出して読むものになぜ書くようになってしまったか、声を失つてしまったか、むしろ声を否定して活字のために詩を書き始めたわけですから、なぜ音をつぶし、音を犠牲にしたかという反省がつねにあったわけですね。

だけどそれをこんど声に出して読むときに、本人だから原作に忠実になる必要がないんです。たとえば、どなたか俳優さんがお読みになるとしたら、この詩がどういうイメージで、どういうことをいおうとしているかを考えて読まねばなりませんし、どんな助詞もおろそかにできない。そして勝手にことばを変えるなんてとんでもないことですし、行の区切りも厳密に守らなくてはならない。ところが最初の「きみの物語はおわった」というところで行が切れているけれども、書いた本人はわたしですから、そこで「おわらなく」て次の行へ渡ってもいいんですね。あつかましくも、わたしが他人の詩作品でなく自分のものをもちだしたのはこういう理由

からだだったので、その作者の特権を活かして読みますから、息づきというのがわたしのなかでどういうふうに意識されたか、注意してお聴きになってください。

まず、もとの行分けの形は次のようになっています。

静物

きみの物語はおわった

ところできみはきょう

おやつになにを食べましたか

きみの母親はきのう云った

あたしゃもう死にたいよ

きみはきみの母親の手をとり

おもてへ出てどこともなく歩き

砂の色をした河を眺めたのである

河のある景色を眺めたのである

柳の木を泪の木と仏蘭西では云うのよ

といつかボナールの女は云った

きみはきのう云ったのだ

おっかさんはいつわたしを生んだのだ

きみの母親は云ったのだ

あたしゃ生きものは生まなかったよ

この詩を、わたしの読みにしたがって、息をつぐところまで続けます。試しに、この表記にしたがって読んでみて下さい。

きみの物語はおわったところできみはきょうおやつになにを食べましたか
きみの母親はきのう云ったあたしゃもう死にたいよ

きみはきみの母親の手をとりおもてへ出てどこともなく歩き砂の色をした河を眺めたのである河のある景色を眺めたのである

柳の木を泪の木と仏蘭西では云うのよといつかボナールの女は云ったきみはきのう云ったのだおっかさんはいつわたしを生んだのだきみの母親は云ったのだあたしや生きものは生まなかつたよ

どうして一行ごとにきちんと切らないでつづけたか、どこで息を入れたか。次の詩は、斜線（／＼）が息を入れた箇所です。この形から、通常の詩の行分けに直せばどうなるか、それは、どれほど違うものになるか、あるいはならないか、想像してみて下さい。

はじめてのうた

土地は西の方にあったわたしのふたりの血族わたしはかれらのうしろから西の方をのぞいた／大きな川がありその堤防のしたにひくい軒の家がたてつづけにあり背の

ひくい男と女がたてつづけに背のひくいコドモをうみつづけたそのずっとはずれの
ずっとひくい土のなかへステテコをぬいでひとりでおりにいったオトコがわたしの
チチオヤだということだったのだシャミセンの胴をふとい撥はもでたたいて見送ったの
がわたしのハハオヤだということだったのだ／ひとびとは曾根崎の料理屋で高野豆
腐をたべてかえったということだったのだわたしにはなにも見えない屋根のうえか
らなにもおちてこないひとびとはひとりのオトコがいなくなったのでそのオトコが
死んだといっているのだわたしにはなんにも見えないただひとびとはわたしがいな
いのにわたしが死んだとはいわないのである／雨のふらない土地をきみはあるいた
道端のスペインの椅子にかけてレモネードをのみながらきみはしばしば涙をきんだ
ひとびとはきみをふりかえりほほえんで過ぎ去ったきみかひとびとのだれかがいち
どクシャミをすればなにもかも終るなんてだれも信じようとしただけである／タ
マゴ色の光線樹木のかげひろい道のしろさにんげんの髪の色時代の景色がサングラ
スの前でたおれるきみのヒミツなんてたかがしれてるよきみは一日中あるいたよう

な気がしているきみはきょうも死ぬまでの一日をヒマつぶしてきたわたしはコトバをほしいと思わないわたしはきみを殺したいだけであるわたしのコトバでそしてこの希望のみえすいたウソ／堤防のしたのひくい土地の土のくぼみに繁殖した梨色の世界その辻でわたしはねむりその便所でたべすぎたものを吐いたそしてときには布をつくる工場のわきでヒトとヒトが交接するのを見物した海からのひびき瓦のように割れる土地でおびただしいコドモがうまれおびただしい洪水がありそこはいつも暑かった流されたひとびとはまたすぐにもどってきてコドモはひしめいていた／終わらない土地発生の部屋でわたしのチチオヤというひとりのオトコはやっとこさ死んでくれたきみは噴水をあびながら動物のように逃げまわったきみの真夏のこいびとは毛糸の服を買ってもどってきたきみは電話をかけたきみは逃げるつもりだとなりの木戸をくぐってきみは逃げるつもりだ他人とねるひまもおしんできみは逃げるつもりだきみは失っていない／ひとりのおんながからだをひらいてひとりの他人がそこにたおれた水をくださいきみは座蒲団をととのえておんなと他人をいまだ